

龍溪性潛年譜稿

大槻幹郎

凡例

参考文献及び略号は次の通りである。

- 1 塔銘Ⅱ特賜大宗正統禪師龍谿和尚塔銘〔高泉禪師洗雲集差十五所收〕
- 2 禪師伝Ⅱ法輪山正明寺龍谿禪師伝〔仙門淨寿黄檗略譜所收〕
- 3 過去帖Ⅱ祥峰山慶瑞寺過去牒
- 4 二会録Ⅱ龍谿禪師妙心寺・普門寺二会語録
- 5 語録Ⅱ特賜大宗正統禪師語録
- 6 興福語録Ⅱ隠元禪師扶桑国長崎興福禪師語録
- 7 興福語録Ⅱ長崎興福寺語録(隠元禪師語録)
- 8 普門語録Ⅱ黄檗和尚語録住摂州普門・福元禪寺
- 9 普門語録Ⅱ黄檗和尚普門語録
- 10 普門統録Ⅱ隠元禪師普門統録
- 11 普門草録Ⅱ隠元禪師普門草録

- 12 普門艸錄 〓 隱元和尚普門艸錄
- 13 雲濤二集 〓 黃檗隱元和尚雲濤二集
- 14 雲濤三集 〓 黃檗隱元和尚雲濤三集
- 15 扶桑語錄 〓 黃檗和尚扶桑語錄
- 16 太和集 〓 黃檗和尚太和集
- 17 隱元全集 〓 平久保章編 新纂・校訂隱元全集 開明書院 一九七九年刊
- 18 松堂統集 (隱元松隱堂時代の詩偈集)
- 19 耆年髓錄 〓 黃檗隱元和尚耆年髓錄
- 20 七袞壽章 〓 黃檗開山和尚七袞壽章
- 21 八十壽章 〓 隱老和尚八十壽章
- 22 仏舍利記 〓 黃檗山御賜佛舍利記
- 23 木庵統錄 〓 黃檗木庵和尚統錄
- 24 木庵全集 〓 平久保章編 新纂・校訂木庵全集 思文閣出版 一九九二年刊
- 25 即非全錄 〓 即非禪師全錄
- 26 即非全集 〓 平久保章編 新纂・校訂即非全集 思文閣出版 一九九三年刊
- 27 滄浪声 〓 佛日慧林禪師滄浪声
- 28 慧林錄 〓 佛日慧林禪師語錄
- 29 獅林錄 〓 獅林 (独湛) 老和尚広録
- 30 芝林集 〓 南源禪師芝林集
- 31 悅山録 〓 黃檗悅山禪師語録
- 32 洗雲集 〓 高泉禪師洗雲集
- 33 高泉記念録 〓 佛国開山大円広慧国師記念録

- 34 端山記念録Ⅱ端山正和尚記念録（青木甲斐守重兼法名端山性正の年譜）
- 35 原由Ⅱ黄檗宗派原由（平久保章写）
- 36 宗鑑録Ⅱ黄檗宗鑑録
- 37 黄檗遞代譜略Ⅱ日本黄檗萬福禪寺遞代譜略（山本悦心）
- 38 柳營日次記（内閣文庫、国立公文書館）
- 39 徳川実記（国史大系本、吉川弘文館刊）
- 40 通航一覽（林煒等編、国書刊行会刊行書）
- 41 黄檗外記（無著道忠撰、黄檗文華41、43号）
- 42 原日記Ⅱ原団之丞正純書留日記、吉永雪堂写、牧野子爵家所蔵記録、前久夫「万福寺伽藍に関する覚書」（二）、黄檗文華23号
- 43 正法山誌（無著道忠撰、東林院、昭和十年刊）
- 44 妙心寺史（川上孤山著、妙心寺派教務所、大正十年刊）
- 45 鷲尾研究Ⅱ鷲尾順敬 日本禅宗史の研究、教典出版、昭和二十年刊「黄檗派の開立と龍溪」外論文
- 46 辻仏教史Ⅱ辻善之助 日本仏教史、岩波書店
- 47 普門文書Ⅱ普門寺方丈修理報告書、普門寺、昭和五十九年刊
- 48 萬松下寺院志（吉永雪堂稿、黄檗文華殿）
- 49 本光日記Ⅱ本光国師日記、大日本佛教全書本
- 50 町史Ⅱ赤松吉雄、富田町史、富田町役場、昭和十一年刊
- 51 文書Ⅱ慶瑞寺所蔵文書

註一、隠元・木庵・即非全集の算用数字は頁数を示す。

二、慶瑞寺所蔵文書で、略語としてこの目録にあがっていないものがある。

三、（一）の中に寺蔵また墨跡とあるのは、慶瑞寺蔵の絵画・墨跡・文書等である。

四、龍溪を主とする年表であるので、特に固有名詞で示していない場合がある。

西曆	年号	干支	年令	月日
一六〇二	慶長七	壬寅	1才	七・三
一六〇六	〃 一一	丙午	5	
一六〇九	〃 一四	己酉	8	
一六一七	元和三	乙卯	16	
一六一九	〃 五	己未	18	
一六二〇	〃 六	庚申	19	五・三
一六二一	〃 七	辛酉	20	
一六二七	寛永四	丁卯	26	

## 記 事 ( 出 典 )

未刻、京都に出生。俗姓奥村氏。父は奥村清三郎、法名を淨林居士。母は三好氏<sup>①</sup>という。生れつき多病で、父母は常に仏に禱うという。(塔銘・鷲尾研究)。

急に病んで死すという。適々僧が托鉢に訪れ、腰下に灸をすえて蘇る。以来父母と共に益々信心を深める(塔銘)。

この年、東寺に入って真言密教を学ぶ。時に叔父某、氣宇の超邁なるを見て、禪門に入ることをすすめる(塔銘)。

摂津国島上郡富田庄、慈雲山普門寺第九代籌室玄勝に投じ、剃髪して禅学を修める。法諱を景琢と号す(塔銘)。

錫を杖いて遊方する(塔銘)。遊方は、三十歳半ば頃まで、断続しながら続いたものと思われる。寛永十年の記事参照。

受業師籌室示寂する(過去帖)。籌室は多年普門寺に住持して中興と称し、景琢後住となるという(普門文書・町史)。

この年普門寺方丈宮建(普門寺正保二年棟札)。

時に大徳寺・妙心寺の出世について幕府の穿鑿が行われ、対応をめぐり硬軟両派が対立、妙心寺軟派の中心が將軍家康以来信頼の厚かった伯蒲慧稜で、景琢はこの時期側近にあつて、参謀の役割を荷うという<sup>③</sup>。(本光

一六二八	〃	五	戊辰	27	
一六二九	〃	六	己巳	28	
一〇・一	六・三	八・九	七・三	六・九	<p>日記三十八・正法山誌五)。</p> <p>五月龍安寺伯蒲に従い、事件打開について金地院崇伝に会うため江戸に向う。しかし崇伝は南禅寺山門落慶のため江戸を出立しており行き違い、伯蒲は神奈川と箱根の宿へ態飛脚で書状を届け、返書を受けているが、崇伝は十九日に南禅寺に到着する(本光日記三十九)。</p> <p>六・十九付で伯蒲は、京都の崇伝に書状を飛脚に托するが文中に「愚老義、年八十余、万般忘脚仕り理事不正に候云々」とある。三通の長文にわたる書状で、景琢は侍者として従い、伯蒲を補佐していることが知られる(同右)。</p> <p>七・二三付崇伝宛書状で、伯蒲は老中土井大炊頭利勝に会見し望み通り上聞に達したこと、来月二十日ごろ帰洛すると報じる(同右)。</p> <p>伯蒲江戸よりの帰路、江州土山で示寂する。世寿八十五。景琢らは喪を秘し、使いをもつて妙心寺大衆に出迎えさせ、景琢が乗輿のまま伯蒲に代つて労を謝して龍安寺に帰寺し、三日後に発表する(正法山誌五)。</p> <p>妙心寺派硬派の単伝土印の発言を記し、龍安寺景琢・梵竹・玖首座が連署して、酒井雅楽頭忠世に書状を送る。これが単伝配流の理由になった旨、六・二六付単伝が崇伝にとりなしを求めて提出した「謹書置」にある(本光日記四十一)。</p> <p>一〇・一付で龍安寺景琢が梵竹・守悦と連署し、十四日書状及び九年母</p>

一六四四	正保元	甲申	43	九·二
一六四三	〃 二〇	癸未	42	八·九
一六四一	〃 一八	辛巳	40	八·二
一六三八	〃 一五	戊寅	37	四·三
一六三六	〃 一三	丙子	35	
一六三三	〃 一〇	癸酉	32	一·〇
一六三一	〃 八	辛未	30	九·七
				八·三

五十、きんかん五百ほどを金地院の崇伝に贈る（同右）。

龍安寺潛首座<sup>㊦</sup>として、五山井に妙心寺役僧と共に、將軍家光病氣平癒祈禱札を西之丸において、大老土井大炊頭利勝・酒井阿波守忠行に納める（本光日記四十四）。

九・十七付状を龍安寺より崇伝及平賀清兵衛に贈り、東上の礼を述べ  
る<sup>⑧</sup>。(本光日記四十五)。

一六三三	〃	一〇	癸酉	32	一・三	丑の刻、金地院崇伝示寂する。世寿六五（本光日記四十七）。
------	---	----	----	----	-----	------------------------------

遊方はこの頃まで断続して続いたものと思われ、浪風臥雪、凡て十五年の糟粕であることを識り、力を極めて参究すること又六年」という。

乃ち慶快を得たりとするのは、このころとなろう（塔銘）。

妙心寺住持愚堂東寔が、清涼殿に於て說法、五山僧衆らと共に龍安寺塔頭阜東庵龍溪座元として列席する（妙心寺史下、九二頁）。

伯蒲十三回忌を営む。(妙心寺史下)

この年のちに法弟となる独本性源・その弟子龍潭道珠、木庵性瑫の法嗣となる慧端（良寂道明）が阜東庵に参禅する（独本行業記）。

このころ慈雲山普門寺に住山する。

高槻城主永井市正直時夫人徳松院が没し、遺命により金襴衣并に淨財が施入される（画像賛・寺蔵）

一六四五	〃	一六四六	一六四七	一六四八	一六四九	一六五一	一六五二	〃	一六五三
〃	〃	〃	〃	慶安	〃	〃	〃	承応	〃
二	三	四	元	元	二	四	五	元	改元九・八
癸巳	丙戌	丁亥	戊子	己丑	辛卯	壬辰	〃	〃	〃
44	45	46	47	48	50	51	〃	〃	52
八月	八・五	三・六	一〇・八	一〇・五	九・三	七・五	九・三	〃	〃

徳松院の寄進による方丈が移建され、厨房等数字が建立される（普門寺「丈室上梁」棟札）。

徳松院画像賛を書す（寺蔵）。

普門寺新鐘銘并に序を書す。鐘銘中に「幹縁主事祖澄」の名がある（二會録）。

普門寺蔵の雲板鑄造成る（銘文・寺蔵）。

初祖忌辰に当り龍安寺西源院宗哲首座が工に命じ達磨・百丈・臨濟像を造立し、この日龍安寺祖堂に安座拈香を請われ偈がある（二會録）。

後水尾上皇長谷に行幸し、宮中の頼土・林下の詩僧を召して賞月するに当り一律を賦す（二會録）。

妙心寺住持勸請繪旨を受ける（塔銘）。

○除夜、普門寺において小參法語（二會録）。

普門寺觀世音菩薩像の修補成る（二會録）。

後光明天皇より紫衣を賜い、正法山妙心寺住持に勸請され繪旨を受け進山するも、いくばくもなくして退山する（塔銘・寺蔵・二會録）。

○この頃、妙心寺仙寿院の禿翁妙周が、京都の本屋が持込んだ三十巻一括して買求めた中に、隠元録二巻があり、龍安寺の浴室に入浴した際龍溪に話し、龍溪はそれを借り大いに奇としたという（黄檗外記）。

この年『虚堂和尚語録鈔』を板行する（奥付）。

一六五四

〃

三  
甲午

53

繪旨を受け再び妙心寺に住す。「正法山妙心禪寺再住之拙語」がある（二  
会録）。

七五

晩、福建省福州府の黄檗山萬福寺の隠元隆琦、長崎興福寺逸然性融及び  
長崎唐寺の檀越の招請により、独言性聞、独知（慧林性機）良者（大眉）  
性喜・独吼性獅・独湛性瑩・非泉良衍（南源性派）等僧俗三十名と共に、  
国姓爺船で長崎港に入る（獅林老和尚広録九）

七六

早朝隠元、逸然らに迎えられて興福寺に進山する（興福録・隠元全集一  
六〇三）。

七六

隠元が興福寺開堂を行う（同右・隠元全集一六〇五）。

二・二五

同じく最初の冬安居結制上堂を行う（同右・隠元全集一六四〇）。

三・二三

参堂した広島禅林寺虚樞了廓の一二・一三付、法弟妙心寺仙寿院禿翁妙  
周宛書簡に於て、

（一）龍溪のことを隠元に詳しく伝えたところ事の外満足そうであった。

（二）隠元を妙心寺に請待のこと禿翁とは別に取り持つこと然る可しと  
し、虚樞の内意について龍溪へよくよく相談されたいなどである。

○この文面から、この時点で隠元の妙心寺招請計画がはじめられており、  
龍溪は首謀者の一人に加わっていたことが知られる（妙心寺史下）。

○この頃、天球院堤宗慧全に隠元招請の件をすすめ、堤宗は長崎の隠元  
に参じ、以来熱心な協力者となる（妙心寺史下）。



一六五五

明曆元

乙未

59

六・二

この頃隠元の妙心寺招請は、愚堂宗築らの反対により止み、普門寺・龍安寺の間を往復、隠元の普門寺招請計画を進めていたものと思われる。六・一付、牧野織部正成常書簡に、龍溪の意をうけた竺印が幕府要路に働きかけていることが知られ、成常が長崎奉行黒川與兵衛・甲斐庄喜右衛門、大坂町奉行會我丹波守古祐・松平隼人正重次に通達して、妙心寺禿翁・龍溪による隠元を普門寺招請の訴訟が評定所に於て裁決され、竺印が下向するについて然る可き様指示することを依頼する(多福院文書、鷲尾研究所收)。

七・七

竺印、龍溪らの普門寺請啓を興福寺の隠元に達する(普照年譜・鷲尾研究・妙心寺史)。

○請啓に対し「復龍溪大德書」が齎され、「拳は定めて桂月(八月)に在らん」とある(興福語録・隠元全集二二〇〇・寺藏)。

九・六

早朝隠元一行を出迎え、方丈に入らしめ、自らは寺主として西南隅の小茅舎に居す(普門草録・隠元全集二六六・普門録二八五三)。

〃

同日隠元の普門入寺に当り、六か条の指針を龍溪・禿翁・竺印に示す(寺藏墨蹟)。

九・二

隠元を西原の慶瑞古蹟を案内して、中興の意を示す(普門録・隠元全集二六〇五)。

一〇・二

普門寺檀越板倉周防守重宗が来寺して、隠元に始めて会う(同右二四二

一六五六

〃

二  
丙申

55

一・普照年譜。

(二・九) 板倉重宗が再び来寺する(同右二四二四)。

十月 ○隠元に依頼した普門寺鐘銘が成る(普門文書)。

二・四 檀越板倉重宗、禿翁・竺印・祖澄・祖団・法曇らと、隠元に普門寺開堂を請い円満する(普門録・隠元全集一七四九・寺藏開堂法語)。

○隠元に「普門福元禅寺」の額字を書せしむ(寺藏)。

○この頃までに普門寺方丈襖絵を、狩野安信に制作させる(普門寺文書、現存)。

三月 「示龍溪禅徳」七言四句三首を贈られる(普門録・隠元全集二八六一・二八六三)。

冬日、「示龍溪禅徳」法語が贈られる(普門録・隠元全集一九六八・寺藏)。隠元の元旦祝聖上堂が行われる(普門録・隠元全集一七六六)。

四月 無上性尊が長崎に帰来し故山の弟子・檀越たちの書簡を携える。これは夏のうち隠元に届けられたものとみえ、三年の約束通り帰国促す内容で帰意を示す。折柄龍溪が江戸から帰寺し懇留する(普照年譜)。

五・三 五・三付で幕府の覚書が達せられ、隠元について、龍溪・禿翁・竺印の希望通り普門寺に留め、また禅堂の建立が許可される(文書寺藏)。

五・三 隠元のために建立した西来亭が成る。隠元の故国を懐う七絶二首、西来亭雑詠十二首がある(普門語録・隠元全集二八七二)。

七月	○普門寺禪堂建立募縁のため隠元の「募建禪堂偈」がある（寺蔵）。 普門寺禪堂上梁が行われ、隠元に上堂を請い法語がある（普門語録一七六八・拙道禪堂記寺蔵）。
八・元	
九・三	徳松院十三回忌に当り、隠元の薦偈を乞い「薦徳松院夫人寺主龍溪求」の七言古偈がある（普門語録・隠元全集二七〇二）。
同・六	無上性尊が長崎より普門寺に至り、隠元が古黄檗の檀越たちや慧門如沛・無得海寧らに三十余通の復信などを故山に托す（普照年譜・滄浪声上）。 ○この頃隠元の「与龍溪禅徳」の書を贈られ、今秋帰国の志を示される（普門語録・隠元全集二二〇八・寺蔵）。
十月	隠元が禿翁妙周・竺印祖門に請われ、入洛し禿翁の仙寿院、竺印の龍華院、妙心寺・南禅寺・東山大仏・東福寺などを巡歴し、龍華院に三宿する（普門語録・隠元全集二八九二〜二八九七・黄檗外記）。
二・三	普門寺に釈迦如来・迦葉・阿難三尊像が造立される（釈尊光背銘・普門文書）。
二・三	板倉重宗が下総国関城に於て卒し、龍溪の「薦性真居士」七言四句偈がある（語録二）。
同・八	臘八上堂に次いで、戒子として性会と共に隠元に上堂を請う（普門語録・隠元全集一七九六・法語寺蔵）。 同日、隠元が禪堂に「獅林」の額字を書す（普門寺に現存、年紀による）。

元旦	祝聖、隠元の上堂法語がある（普門語録・隠元全集一八五三）。
一・五	上元解制、逸然独融が隠元に上堂を請う（右同・隠元全集一八〇九）
一・七	付禿翁と連署して、寺社奉行安藤重長・松平勝隆に宛て、冬安居を終え昨秋来の隠元の帰唐赦免を願う書状を記す（多聞院文書・鷲尾研究・辻仏教史所収）。
同・三	付龍溪は牧野織部正成貞に宛て隠元帰唐の訴訟等、然る可く指図を願う書状を竺印に托す（同右）。
二・三	龍溪、江戸に至り、牧野織部正成常邸に到着、隠元の在留処遇について相談するなど、二十五日付書状がある（禿翁他宛書状、仙寿院文書・辻仏教史九所収、以下同）。
同・三	酒井讃岐守忠勝邸に赴き、晩には久世大和守広之邸で指図を受け種々談合する。
同・三	未明より老中方を廻り対面して懇ろに挨拶を行い、朝には松平伊豆守信綱邸へ、斎を頂き、松平備前守正信・松平出雲守勝隆同席で、隠元の噂など数刻を過して好意的な感触であった。
同・四	次いで井上河内守正利役宅では息女の喪中で、板倉阿波守重郷でも対面がなかったが、永井日向守直清邸で一段と懇ろな挨拶があった。 松平勝隆邸で斎の約束があり参上し、懇ろな指図があった。晩八ッ過ぎに稲葉美濃守正則邸に参上の予定である。

一六五七

〃

三

丁酉

56

○旗本近藤登之助貞用は、熱心な信心帰依者であり、隠元の開示法語を自分も申し上げるが依頼されたい、また去年没した息女の法事についても頼まれたいとある。

○江戸での宿を番町の旗本榎斐五左衛門政之宅に極めているとしている（以上同前。宛名は禿翁妙周・拙道元澄・独航性安・独聞・惟徹道澄で、なお隠元、唐僧たちへも申し達しられたいとしている）。

三月 普門寺禅堂に「獅林」の額を掲げる（普門寺現存）。

四月 後水尾法皇に仙洞に請われ、内殿に入つて問法奏対し、旨に叶い「徳山入門使棒」和歌頌の宸翰を賜う。これ機機投合の始めという（塔銘寺蔵）。復た隠元の命を受け、帰唐の許可を得るため江戸に赴くに偈を贈られる（雲涛二集六・隠元全集二九〇二・普照年譜）。

七月 唐僧隠元、普門寺に寄寓するにより、寺に月俸を給う（徳川実紀八）。

八月 龍溪、寺社奉行松平出雲守勝重役宅に出頭し、隠元の普門寺在留について「覚書」三か条を令達される（柳営日次記・徳川実紀・寺蔵文書）。

八月 江戸より帰寺して、隠元に覚書の主趣と僧糧の給付、在留の上弘法せよとの旨を伝える（普照年譜）。

九月 九・五付、「覚書」、老中松平伊豆守信綱・阿部豊後守忠秋連署で、隠元に百人扶持下され龍溪・禿翁・竺印に七月朔日より渡されるとある（通航一覽二〇八所收）。

一六五八

〃

四

戊戌

57

元旦

祝聖、隠元の上堂法語がある（扶桑語録・隠元全集一八五三）。

一・五

冬安居解制に、龍溪弟子松山宗珊知浴として休生信士を領して隠元の上堂を請う（同右・隠元全集一八五五）

夏、江戸に赴くに当り、隠元の「龍溪寺主往江府因示」の四言長句がある（普門統録・隠元全集三〇〇六）。

七月

龍溪江戸から帰寺し、隠元に將軍に謁見のため登城の旨を伝えるが力めて拒む（普照年譜）。

○龍溪、青木甲斐守重兼端峰居士と共に応請を勧め、隠元諾する（普門統録・隠元全集三〇〇六）。

九六

幕府から夫馬が与えられ、隠元一行が龍溪・禿翁と共に普門寺を出発する（普門統録・隠元全集二九一八・普照年譜）。

同・六

東海道を経て江戸に到着し、天沢寺麟祥院に寓する（普門統録・隠元全集二七五八）。

同・七

唐僧隠元禪師天宅寺到着に付て、上使寺社奉行井上河内守正利・老中松平伊豆守信綱が遣わされる（柳営日次記）。

二〇・元

龍溪登城して、隠元の明後日將軍謁見の作法等打合わせる（同右）。

二・一

隠元、龍溪・禿翁同伴で、江戸城大広間に於て將軍家綱に謁見する。進物として「二巻・仙香百本・墨十六挺進上、黄檗和尚華語録・隠元禪師扶桑語録五冊献上する（同右・徳川実紀八・普照年譜・普門統録・隠元

	一六五九	
	〃	
	二	
	己亥	
	58	
同・三	同・六	同・四
全集二九三三)。	禿翁と共に殿中に招かれ、隠元に御暇下され、白銀百枚・時服十、龍溪に時服五、禿翁に時服三下さる(柳營日記記)。	天沢寺を出発する(普照年譜)。
	普門に帰寺する(同右)。	
	九)。	
一・二五	冬安居解制に当り、隠元が辞衆上堂を行い、寺主龍溪に帰国の意を幕府に稟す(同右・隠元全集一八八六)。	
同月	隠元が直指庵独照性円に招かれ、洛西嵯峨へ赴くのに従ったものと思われる。西芳寺・直指庵・高碓神護寺・天龍寺・清涼寺・愛宕山などを巡り三宿して帰寺する(同右・隠元全集二七六〇〜二九三八・普照年譜)。	
二・三	隠元が摂津麻田藩主青木甲斐守重兼の造立になる仏安座に請われ、麻耶山佛日寺と命名する(普門草録・隠元全集二六五二)。	
二月	隠元が山城淀前藩主永井信齋 <sup>㊦</sup> に請われ、宇治の興聖宝林禅寺を訪れ、朝日山・平等院を巡り、二十二日には隠居所處齋に招かれ問答を行う。通訳には劉道詮(彭城仁左衛門)が同行したと思われる(同右二七六三)。	
四・五月	この頃隠元の帰国の意を受け幕府の許可を求めるため江戸に入るが、龍溪は隠元在留への最終工作を行う(雲涛二集八・隠元全集二九〇二)。	

六・八	龍溪が江戸より帰寺して、隠元ため京都辺に新寺開創の令旨を受けたことを伝える。時に隠元は「龍溪江戸回偶有雷雨」と題する七言八句を詠じ、時に雷雨があり稲妻と共に心膽を照らされると心境を述べている（普門草録・隠元全集二三三六～二九四五）。				
八月	○早速龍溪が寺地の撰定を請われ、山城宇治郡の太和山を候補地とし、隠元を案内する（同右・隠元全集二九四八・普照年譜）。				
九月	「贈龍溪禪徳偈」があり、隠元が普門寺入寺以来方丈を譲り、小茅屋に居して五年を経て、その間再四にわたり江戸を往還し、この秋弟子達により居室が落成したことを述べ、五言古一篇を贈られる。これは新寺建立のめどが立った時点での謝意を込めたものである（普門草録・隠元全集二六六六）。				
二・三	隠元が大坂の秋野信士に招かれ天王寺に遊び、ついで大坂定番安部撰津守信盛、大坂町奉行曾我丹波守古祐、小浜民部少輔嘉隆の斎に招かれ、大坂町奉行彦坂壹岐守重紹に示偈を贈っている。また龍溪・虚櫛と共に菊を賞でて七言四句三首がある（同右・隠元全集二七六八）。				
二月	太和山を新建の地基とする令旨を受ける（同右・隠元全集二六八〇）。				
三月	隠元、木庵らと共に、また太和山に赴く（雲涛二・隠元全集二七八五）。隠元、応頂山勝尾寺に遊び、「禮白檀千手大悲像」「登般若台」などの紀詠がある（普門草録・隠元全集二六八五）。				



一六六一	寛文元	辛丑	60	元且	四・元
				三・六	六月
				二・三	七・三
				一・三	一〇・三
				集一九六一・普照年譜	八句がある（普門艸録二七八二）。
				隠元の名代独知性機と共に、京都所司代、京都町奉行より、太和地基の引き渡しを受ける（普門艸録・普照年譜・原日記）。	長崎福濟寺に住していた木庵性瑠が隠元を普門寺に省 <small>せい</small> 観するのを迎える（語録二・普照年譜・木庵年譜）。
				開山となるのに従ったものと思われる（端山記念録・普門草録・隠元全集一九六一・普照年譜）。	隠元が青木重兼端峰性正居士に請われ、佛日寺の七日結期の佛事を修し
				和集卷一・隠元全集三一八五）。	開山となる（端山記念録・普門草録・隠元全集一九六一・普照年譜）。
				隠元が普門寺最後の祝聖上堂が行われる（普門艸録・隠元全集一八九八）。	八句がある（普門艸録二七八二）。
				春日、地基受領後、始めて黄檗山に上り「春太和に入りて、和氣濃かなり云々」の七言八句がある（語録二）。	長崎福濟寺に住していた木庵性瑠が隠元を普門寺に省 <small>せい</small> 観するのを迎える（語録二・普照年譜・木庵年譜）。
					（語録二・普照年譜・木庵年譜）。
					隠元が青木重兼端峰性正居士に請われ、佛日寺の七日結期の佛事を修し
					開山となる（端山記念録・普門草録・隠元全集一九六一・普照年譜）。
					和集卷一・隠元全集三一八五）。
					隠元が普門寺最後の祝聖上堂が行われる（普門艸録・隠元全集一八九八）。
					春日、地基受領後、始めて黄檗山に上り「春太和に入りて、和氣濃かなり云々」の七言八句がある（語録二）。

四・一	<p>隠元の名代として、慧林性機と共に、寺地拝領の將軍への御札に登城、祝允明書卷一軸<sup>®</sup>を献上する柳の間に於て、老中松平伊豆守信綱と寺社奉行井上河内守正利列座して行われる。(徳川実紀卷四十一・柳營日記・普照年譜)。</p>
同・六	<p>慧林と共に、帰寺挨拶のため登城し、龍溪に拾五、慧林に同三下賜の旨、松平伊豆守信綱より伝えられる(徳川実紀・柳營日記)。</p>
五・八	<p>この日を以て、新黄檗の開創とする。『普照国師年譜』に、「五月初八日太和開創す。仍て黄檗山萬福禪寺を以て之を名づく。旧を忘れざること志<sup>し</sup>すると也。故に東西両黄檗之語有り」とある。龍溪らの素志ここに貫徹するに至った。</p>
六・九	<p>隠元の命を受け、大眉性善ら八人が新黄檗経営の庶務に当たる(黄檗山遞代譜略・悦山録卷一)。</p>
七・三	<p>龍溪六十の祝寿に当り、隠元の「贈寺主龍溪六旬初度」の五言古一篇を贈られる(雲涛二集二・隠元全集二六九九)。</p>
八・三	<p>ほか慧林・独湛らの寿詩がある(墨跡)。</p>
同・八・九	<p>隠元の普門寺辞衆上堂が行われ、一行が新寺地に移る(扶桑語録五・隠元全集一九〇八・原日記)。</p>
同・九	<p>新寺地に仮屋が出来る<sup>®</sup>(原日記)。</p>
同・二九	<p>隠元が木庵・龍溪ら多くの唐和僧を従え、山城宇治の黄檗山萬福寺に進</p>

一六六二

〃

二

壬寅

61

九月

山する（大和集一・隠元全集三一八五・慧林録卷六・黄檗宗派原由）。ここに臨済宗黄檗派教団の本格的な活動が始まる。

高泉性澈が隠元八十の祝寿のため六月暁堂道收らと長崎に渡来し、九月登檪する。以来龍溪と親近し塔銘の筆者となる（高泉記念録）。

二・四

隠元七十の祝寿に当り、古黄檗の嗣法弟子ら并に檀越、新黄檗の両序及び多くの唐和僧から寿詩・寿文が贈られ、龍溪は「従心所欲愈天真云々」の七言八句を以て謝す（黄檗開山和尚七袞寿草）。

この年、摂州嶋上郡富田庄の古蹟慶瑞寺を村中より寄進される（文書）。

○この年祖翁費隠通容の訃至り「祭福嚴費老和尚文」を供える（語録三）。

この年の初め、慶瑞寺の方丈・厨庫・諸寮を建立し、祥雲山慶瑞寺と改める（大阪府志・町史一〇二頁）。

○前年隠元の賀寿に登檪し、帰国せんとした高泉性澈・暁堂道收を諸友と共に留め偈を贈る（語録二）。

七・三

前大老酒井忠勝空印居士の訃に「薦酒井空印居士」七言四句、「祭酒井空印居士文」がある（語録二・三）。

秋、慶瑞寺内に如常軒を営み、木庵から額字、独湛から「祥雲居」の額字及び「結茅慶瑞詩」等を贈られる（寺蔵）。

三・二

江戸から帰寺し、隠元に黄檗山開堂祝聖を請う將軍の令旨を伝える（雲濤三集二・隠元全集三五九八）。

一六六三

〃

三  
癸卯

62

一・五

將軍の令旨承けて、隠元の黄檗山開堂祝聖に当たり、白槌となる<sup>⑧</sup>（太和集一。隠元全集三一八八）。

○時に黄檗山に將軍から寺領四百石が寄進され、普門寺への隠元僧糧十五石、富田庄西五百住村・宮田村等莊田を幕府に返上する（町史一一三頁）。

五・五

龍溪、後水尾法皇に仙洞に召され法要を諮詢する<sup>⑨</sup>（普照年譜・太和集一・隠元全集三二三・原由九）。

夏、木庵が慶瑞寺を訪れる（語録二）。

七・五

普門家訓を定める（寺藏墨跡・語録三）。

八月

長崎崇福寺即非如一登檍の途を、慧林・高泉と共に大坂勝性印の心月軒に訪ねる（即非全錄二十・即非全集一〇二七）。

即非八月二十四日登檍（雲濤三集三・隠元全集三六二三）。

○龍溪黄檗山に於て、隠元・木庵・即非を齋に招く（即非全錄七・即非全集二五五）。

二・三

龍溪、酒井忠勝空印居士小祥忌に当り齋を設ける（語録三）。

二〇・五

黄檗山冬安居に当り、木庵・即非が両堂首座、龍溪は独湛と共に西堂となり、参堂の衆約五百人、設齋上堂に問答をする（普照年譜・塔銘）。

二・三

冬至に当り、黄檗山に於て乗弘小参を行う（語録一）。

二・七

黄檗開山隠元寿像を仏師范道生が造立し、諸師と共に志喜和韻、七言八

一六六四					
〃					
四					
甲辰					
63					
五月	五・五	五・三	二月	正・九	同・二
<p>句がある（語録二・普照年譜・黃檗山藏法像手巻）。</p> <p>第一次黃檗三壇戒が開会され、授戒し、法諱性潛とある（寺藏戒牒）。</p> <p>南源性派等と戒子を代表して授戒和尚隠元に謝戒上堂を請う（太和集一・隠元全集三二一六）。</p> <p>この年、龍溪弟子松山宗珊、富田庄宝積寺故地に小庵を建立し宝積寺を号し住持して、慶瑞寺末寺とする（祥雲常住願扣）。</p> <p>龍溪江州蒲生郡日野、法輪山正明寺の請に赴くに当り、隠元の法を嗣ぐ（太和集一付法機縁・隠元全集三二五七・雲濤三集三・隠元全集三六三六、塔銘）。</p> <p>「初入正明寺示徒」の七言四句偈二首がある（語録二・寺藏墨跡）。</p> <p>独湛性瑩が旗本近藤貞用語石居士の請を受け隠元より嗣法して、遠州引佐郡金指の初山宝林寺開山に赴くに当り送偈を贈る（語録二）。</p> <p>後水尾法皇に仙洞に召されて問法、香木を賜わり黃檗山に轉供する。時に法眷諸僧から賀偈を贈られる（雲濤三集三・隠元全集三六四〇・芝林十・五雲二・塔銘・寺藏）。</p> <p>即非如一が慶瑞寺を訪れ、拙道・寂宗二禅座に示す偈がある（即非全錄二十・即非全集一〇六二）。この時「方丈」・「扶桑第一枝」（寺藏）などを揮毫したものと思われる。六月、即非を正明寺に招き弟子千呆らを伴い訪れる（即非全錄二十・即非全集一〇七二・語録二）。</p>					

"

75

64

八月

九  
四

九·五

10.1

萬松下寺院志。

中·15

九・二

10.1

10.1

	一六六六	
	〃	
	六	
	丙午	
	65	
三月	三・九	院に請われ正明寺正殿に法要を営む（語録一・塔銘）。 後水尾法皇に仙洞へ召され、内殿に説戒し、皇女光子内親王法名元瑤に 菩薩戒を授ける（語録一、内殿説戒）。 後水尾法皇に請われ、洛北幡枝山の天寿山資福寺に進山する。前年十月 「天寿山」「資福禪寺」の勅額を下賜されたところであった。法皇、前民 部大輔平忠康を遣し香木・白絹・画屏を、後西上皇からも香幣を贈られ る（語録二・塔銘）。
	二・八	時に隠元より「慧日廓天心」の五字一行を贈られ五言八句の謝偈がある （語録二・寺蔵）。
七月	六・二	後水尾法皇、黄檗山に佛舍利塔を賜い、隠元ら諸僧と謝偈を呈する（黄 檗山御賜佛舍利記付讃頌・語録二）。
	六・二	古黄檗の慧門如沛の計が至り、「晩黄檗法兄慧門和尚」の偈を諸僧と賦す （語録二）。
	八・三	後陽成天皇五十回忌に当り「奉薦先皇後陽成院」の拈香偈を供する（語 録二・塔銘）。
	九・一	慶瑞寺方丈を上棟を行う（棟札寺蔵）。
	一〇・三	金剛寺院小祥忌に当り、逢春門院藤原隆子御匣局に請われ、慶瑞寺に於 て設斎小参を行う（語録一）。
	三月	後水尾法皇に召され、般若心經の要義を問われて『心経口譚』一卷を著

一六六七	〃	七	丁未	66	正月	四・六	五・元	二・七	四・二五 七・三 二・三三
一六六八	〃	八	戊申	67					

し、板行される（塔銘・奥付）。  
後水尾法皇正明寺に中金百両を寄進し、本堂を板葺と為す（正明禪寺記（吉永雪堂写））。  
法皇より勅額「正明寺」・初祖達磨像等を龍溪に賜い、七言八句の謝偈がある（同右・語録二）。  
より翌八年四・一五まで『円覚經』を後水尾法皇に進講する（辻仏教史八・四四六頁）。  
後水尾法皇、禪要を諮詢し法の源底に徹し、龍溪に嗣法して謝恩の宸翰を贈られる（宗鑑錄・塔銘・宸翰寺藏）。  
○この年、酒井空印居士七周忌に当り息女性泰妙慧尼が、亡父の菩提を弔うため金剛般若波羅蜜經を書写して慶瑞寺に納め供養を請う。龍溪は「題妙慧信女親書金剛般若騰空印居士」の七言四句を以て応える（語録二・墨跡寺藏）。  
「戊申元旦」の七言四句がある（語録二）。  
後水尾法皇に仙洞に召され、菩薩大戒を授ける（語録一説戒・塔銘）。  
七・三より翌九年十月二十九日の間、後水尾法皇に『碧巖錄』を進講する（辻仏教史八、四四六頁）。  
牧野成常が没し「薦吉峰居士」七言八句がある（語録二）、高泉題の肖像がある（寺藏）。



一六六九	九	己酉	68	四・八	隱元より專使によつて源流・法衣が齎らされ、示衆小参を行行（語録一 小参・塔銘）。
〃	〃	〃	〃	九・二〇	後水尾法皇より、大宗正統禪師号を特賜され、從來提唱の法輪請益録を 宗統録となし『御版宗統録』として板行される（宗統録序文・塔銘・宸 翰寺蔵）。
一六七〇	十	庚戌	69	一〇・二	後水尾法皇より黄檗山に舍利賛宸翰を賜わり、隠元ら諸僧と和韻する（黄 檗山御賜佛舍利記附讃頌・語録二）。
〃	〃	〃	〃	〇	〇此年正明寺に齋堂を建立し、請われて小参を行行（語録一）。
〃	〃	〃	〃	〇	〇「己酉除夕」の七言四句がある（語録二・墨跡寺蔵）。
〃	〃	〃	〃	元旦	「庚戌歲朝」の七言四句がある（語録二）。
〃	〃	〃	〃	二・三	木庵の賀寿に当り「賀法兄木庵和尚六十初度」の七言八句がある（語録二）。
〃	〃	〃	〃	三・六	仙洞で『証道歌』を進講する（日本仏教史八・四四六頁）。
〃	〃	〃	〃	四・五	正明寺夏安居に当り、後水尾法皇專使を遣し慰問される（塔銘・正明禪 寺記・黄檗山由緒紀年）。
〃	〃	〃	〃	六・四	後水尾法皇七十五歳の祝寿に正明寺に於て金剛道場を啓建する（語録三）。
〃	〃	〃	〃	七・五	解夏して仙洞に謝恩し、登檍して本師隠元に省観して信宿、ついで慶瑞 寺に宿る（塔銘・富田町史一〇二頁）。
〃	〃	〃	〃	八・二五	大坂の諸檀護に請に赴き、九条島の九島庵拙道元澄を迎えられて寓す（語 録二・塔銘）。

八・三

大坂の官衙諸役人の齋に応じ、請われて法要を開示して感銘を与える（塔銘）。

同・三

早朝官衙の遣使が礼謝に来るが、五ツ時分より暴風雨となり山海震動し、高浪となつて寺を吞む。庵主拙道らが避難を促したが一室に坐して「死生は定めなり、逃るべけんや、端心正念せば可なり」として動かず。筆を索めて「三十年前恨み未だ消せず。幾回か屈を受け、爛藤条。今晨怒氣人に向つて嘆く。喝一喝。却倒す、胥江八月の潮」。書き終えて篋中に秘して程なく、浪に屋舎が裂れるも水中に晏坐して動かなかつたという。このとき拙道元澄・自方□規が共に寂す（塔銘・過去帖・黄檗譜略・撰陽奇観卷十七）。

八・元

この日慶瑞寺に迎え帰り茶毘に付す（塔銘）。  
初七忌に当り、隠元黄檗合山に命じ位を設け仏事を営み「目龍溪法子手書辞世偈有感并引」と題する七言八句二首がある（松堂統集四・隠元全集四六七二・寺蔵）。

九・五

同じく木庵の「奉輓勅賜大宗正統禪師法弟龍溪和尚之靈」七言八句・「祭大宗正統禪師龍溪法弟文」ほか慧林性機・独湛性瑩・大眉性善・独吼性獅・高泉性激・法雲明洞・柏岩性節・慧極道明らの輓偈がある（寺蔵）。  
即非如一、龍溪の計を聞いて聖寿山崇福寺に衆等と位を設け作札して、輓偈及び祭文を供す（即非禪師後録五・即非全集一二六九）。

一六七四

延宝  
二

甲寅

一六七一

〃  
十一

辛亥

同・六

即非ほか独立性易・曇瑞（のち千呆性俊）・慈岳定琛・悦山定珠（のち道宗）の輓偈がある（墨跡）。

二七忌に当り、隠元の「目龍溪法子臨終偈因次其韻」の七言四句（松堂続集四・隠元全集四七五〇）、黄檗堂頭木庵の「次龍溪法弟辞衆偈韻」がある（木庵全録二十二・木庵全集三四一〇）。

他南源性派・惟一道実らの輓偈がある（墨跡）。

十月

終七忌に当り、慧林性機・独湛性瑩の臨終偈次韻がある（墨跡）。

〇この年弟子達空道有が慶瑞第二代となるか。

四・二

慶瑞寺主達空道有・杲日・永泰元真等、高泉性激を衣鉢入塔の導師に請い法語がある（墨跡寺藏）。

〇この月洛西嵯峨祥鳳山真指庵の独照性円・月潭道澄の輓偈がある（墨跡寺藏）。

八・三

小祥忌に当り、隠元の「龍溪法子小祥日有感」の七言四句がある（耆年隨録・隠元全集四七八四）。

二・四

隠元八十の祝寿に、弟子寂宗道盛・達空道有・杲日道嵩・石潭道顕・永泰元真等が寿詩七言八句を呈する（隠老和八十寿章）。

〇この年、弟子東巖（岩）道白が黄檗山に塔所萬松院を建立する（耆年隨録・隠元全集四七七六・芝林集四）。

秋、拙道弟子雷軒、富田の正興寺故地を復興し、慶瑞寺末とする（祥雲

一六八〇	〃	八	庚申	正月	常住願扣)。 黄檗堂頭木庵、慶瑞寺達空等龍溪遺徒に対し、慶瑞寺尊重の勸言を示す (墨跡寺藏)。
一六八一	天和	元	辛酉		秋、木庵慶瑞寺を訪れ、新住持永泰の齋に請われる(木庵統録五・木庵全集二七〇五)。
一六八二	〃	二	壬戌	八月	高泉、特賜大宗正統禪師龍溪潛公大和尚御葬塔銘を撰す(宗統録・洗雲集十五)。
					著者に、龍谿和尚二会妙心・普門語録二卷、特賜大宗正統禪師語録三卷、 鐵嘴録一卷、辨正録一卷、御版宗統録五卷、般若心経口譚一卷 寂後、後水尾法皇により、萬松院に真骨を瘞め、正明寺に頂相を、慶瑞 寺に衣盃を收め堂宇が建立される。

## 註

①『鷲尾研究』の「黄檗の開立と龍溪」九五三頁に母は連歌師紹欽の女、紹欽は三好氏の族で、細川高国に仕えたとある。『慶瑞寺過去牒』に「敬堂紹欽庵主 龍祖叔」があり、「八月二十六日」没とあるが、年号の記載はない。なお細川晴元が普門寺の担那で、晩年ここに寓居し、永禄六年(一五六七)ここで没したという。

②慶長十八年(一六一三)、僧録以心崇伝の建策により、慶長十八年(一六一三)六月勅許紫衣法度が發布され、各宗派の寺院法度の制度が進むなかで、同二十年大徳寺・妙心寺法度の制度のため、妙心寺の代表として鉄山宗鈍(一五三二—一六一

七)、伯蒲慧稜(一五四四—一六二八)が幕府との交渉のため二条城に出頭する。翌元和元年(一六一五)七月、鉄山と伯蒲は二条城において、妙心寺法度並に寺領朱印状を下付され、大徳寺も前日同じ内容の法度を受領していた。

しかしその後の経過の中で、法度の理解に幕府側と寺側に齟齬をきたし紫衣事件へと発展することとなる。『本光国師日記』第三十八の寛永四年三月十三日条に、老中土井大炊頭利勝より崇伝のもとに使者があり、西の丸において大徳寺・妙心寺出世の猥れている儀の穿鑿のため出頭のこと記される。これが事件のはじまりとなるのである。このころ両寺では幕府に対する硬派と軟派の対立があり、妙心寺では伯蒲が軟派の棟梁で、このもとで老体の伯蒲を支っていたのが景琢であった。③『正法山誌』に「時に琢首座有り、伯蒲の徒也、才弁有り、常に伯蒲を助け、此の議を主張す。伯蒲耄たり、一に琢の言に依る(原漢文)」とある。加藤正俊「伯蒲慧稜と紫衣事件」『禅文化研究所紀要』第九号所收参照。なお伯蒲について同氏「角倉氏と竜安寺—伯蒲慧稜とその出自をめぐって—」同書第八号参照。

④『大雲山誌稿』・『正法山誌』、加藤論文「伯蒲慧稜と紫衣事件」参照。

⑤『本光国師日記』第三十九 寛永五年八月七日条に、「龍安伯蒲江戸与七月廿三日之状束。伯蒲所存之通、大炊殿御披露にて、達 上聞。忝仕合に候。七月廿八日八朔と、二度に 両上様へ御礼申上。急度可罷上由申来。□易持参也。良長老、清兵へ方へも状来。両通共に案左に有之。

因幸便奉呈愚礼候。仍、愚僧所存之通、以書付。板倉内膳殿。永喜老(申上候へは、則大炊殿へ御披露に而、去十二日に、大炊殿達 上聞候処に老体に而遠路罷下候段、尤殊勝に被思召候由被 仰出候。則御礼可申上候へ共、老衰遠路之疲故、散々相煩、御礼今迄延引仕候。雖然得大験候故、来廿八日に御礼申上可然と、従大炊殿、永喜老迄被仰出候。大和尚御威光故と不淺奉存候。御礼相済候者、来月廿日比上洛、詣閣下、可奉伸謝詞者也。恐惶頓首。

七月廿三日

龍安寺

押進

惠稜在判

国師大和尚三應閣下

とあり、崇伝の斡旋で板倉内膳重昌、林永喜の將軍側近衆への紹介を受け、老中土井大炊頭利勝の知遇を得て、伯蒲の存念

が將軍に達せられたことを述べている。(加藤前掲論文参照)

⑥ 同右、寛永六年七月四日条。

⑦ 同右、寛永八年八月十二日条。この時龍安寺は十六世楊屋宗販が住持職にあり、首座として監寺職にあったものと思われる。はじめて潜首座とみえ、伯蒲の示寂する寛永五年八月には伯蒲の法を嗣ぎ、ついで、崇伝に書状を贈った十月以降、法諱を宗潜と改めたものと思われる。

⑧ 同右、寛永八年九月廿八日条。

⑨ 『妙心寺史』下卷四二六頁に「愚堂、清涼殿上に於ける説法の図」があり、退藏院千山玄松座元と並んでみえる。

⑩ 法名を徳松院殿妙雲心月大師。宗対馬守義成の妹、対馬守義真の子であるが、実は三条転宝輪右大臣公富の妹で、義真に養われて永井直時に嫁した。龍溪に帰依し師資の礼を結び、遺命による寄進によって伽藍の修造が行われた。追薦のため画像が什物とされ、住持隠元が着賛し、慶瑞寺過去帳にも記載されている。当年五十八歳であった。

⑪ 『龍谿和尚二会妙心・普門語録』所收

摂州島上郡慈雲山普門禪寺新鐘銘并序

夫鐘之為器功用大也矣昔枸留孫佛於乾竺造青石鐘八角四面花光互分有化如來與日偕出明宣秘演聞法證聖不可勝数依之如大藏結集五分布薩等昏臂吒健槌且捫僧一称若打鐘時一切惡道諸若並得停止如武帝延杵之詔智奘受絹之驗等不可悉举矣惟悲智助行之德無能如之物是故古來天下仏窟無不鑄大鐘而助大化矣吾説岩禪師曾開此山而建觀自在普門道場布慈雲施法雨應永中戢化而來百有九年矣正保之初一新旧基更二寒暑而諸宇漸成乃募衆緣而新造洪鐘以助真

化之方銘日

津陽上郡 邦畿中原 肅闕仏城 鬱密祖園  
 緇白簪主 覽聖龍蟠 慈雲天窄 法雨雷奔  
 重興梵宇 恢張普門 仰觀自在 欽拘留孫  
 華鯨新構 以奉晨昏 礼染時盛 禪誦事繁  
 增長聞惠 清淨年根 声塵頓去 覺性常存  
 豐嶺霜冷 祇桓春溫 驚百鳥夢 断群魔塊  
 劍輪瞥脱 絨絨平及 庶憑勝徳 国泰道尊  
 傍資六趣 正報四恩 洪音不尽 永等乾坤

正保第四丁亥春二月廿八日庚子

冶工和田信濃大掾藤原国次

幹縁主事 祖澄等

住山 龍溪宗潜 謹誌

⑫同右所收

慶安五壬辰年秘七月十五日修補功畢矣仍

述一偈以充供養

慈雲大悲像依樣致修土千種梵羅手百般嚴飾船  
 金倪蹲座下仙鳥舞光中瞻仰補陀月乾坤今古同

⑬「仙寿院文書」、『妙心寺史』下卷、『日本仏教史』第七卷所收。

隠元の妙心寺招請については、川上孤山前掲書第四節、黄檗隠元の束朝と妙心にその経過が記されている。『黄檗外記』に  
 隠元が渡来したとき、妙心寺の僧竺印祖門が東大寺大仏殿再興の勸化のため長崎に滞在し、隠元から依頼を受け、在留の手  
 段を講ずるため帰洛して同志を集め、その結果虚極書簡のような計画となつたもので、京都所司代板倉重宗の厚意に

より、江戸の幕閣への工作に東上していたという。

⑭外題『隠元禪師普門草録』内題同じく、己亥年に、「贈龍溪禪徳偈」があり、その引に「龍溪禪徳、乙未仲秋請余坐方丈、自居小茅舎於西南隅、經閱五春秋如一日云々」とある。

⑮外題『隠元禪師語録』、内題『隠元和尚住摂州慈雲山普門福元禪寺語録』、「詩偈」に録され、九月念有一日、寺主龍溪請遊西原云々の長い引文があり、中興の志が記されている。

⑯右同書に録され、普門入寺から翌年正月までが收められ、「示龍溪禪徳」と題し三首が録される。第一首は「雪嶺雲收午夜天」にはじまる。

⑰寺藏文書とは稍文言を異にし、「嚴有院殿御実紀卷十四」の七月二十三日条には次のようにある。「けふ寺社奉行の庁に富田普門寺龍溪をめして令せしめらるゝは、唐僧隠元京坂、南都、堺、大津の五所に。あるは十日あるは廿日留滞説法の事ゆるさるべし。そのときは、必龍溪、禿翁、竺印三人の内一りづゝ従行すべし。その他にもゆかまほしきといふ所あらば、奉行所にうたへ指揮うくべし。尤平常は普門寺に居住せしむべし。隠元留錫の地に、問法の僧まかる事二百人にかぎるべし。その余はとどむべしとなり。（日記）」とある。

⑱『柳営日記』万治元年九月十七日条に一隠元禪師と号唐僧、大宅寺へ到着付而、上使井上河内守、松平伊豆守遺候とある。

⑲同右の、十月二十九日条

富田了慶被為左、隠元禪師 御目見様子被仰合候とあり、十一月一日がいよいよ登城で、かなり詳しい記事がある。

⑳『普門草録』所収の「復首座慧門耆旧」と題する古黄檗の慧門如沛宛書簡中に、旧臘江戸より帰寺して帰国の意を決し、翌春解制に辞衆上堂して、寺主龍溪を煩わして「稟上」したが、六月十四日に令旨が下り、「仍留付京開創、未即承領。有耆宿謂、日国令旨於中華勅令、断不可違。況此華法門盛事、中興濟道正在斯矣」として許諾する意を伝えている。（隠元全集二三三六、年譜）

㉑信斎は致仕号で、永井信濃守尚政。寛永十年淀藩十萬石に転封になったとき、道元の遺蹟興聖寺を萬安英種を中興開山に請



い、宇治に再興した。弟永井日向守直清が摂津高槻城主で、隣接の富田普門寺に入寺した隠元や寺主龍溪との関わりがあった。「永井家文書」の中の「所司代宛江戸幕府老中連署状写」に、隠元のことについて「永井日向守へも被申渡之云々」（『高槻市史』所収）とあり、信斎は直清の情報を得て隠元を招いたものであらう。

②②右同書に「己亥季夏十有八日承上旨留附京開創」と題する五言古がある。なお大老酒井忠勝法号空印居士より、万治二年五月三日付の隠元宛書簡があり、「洛辺の攸に相して、梵年を営む可きの地を賜う。君命此の如し。則ち老禪宜しく其の旨に随う可し。祖風を斯に弘めて、帰国之志を催す莫れ」云々と記されている（原漢文 黄檗山所蔵）。

この詩について「承令旨後、与空印居士書」が「普門草録」に録される（隠元全集二二三三頁）。訓読を示すと次のようである。「来翰を拜読して、恍然として対するが如し、兼ねて過拳を以てす、之当に歉愧すべき也、春間寺主を煩わして府に造つて、国主並びに老居士等法護の盛徳を辞謝す。然し僧老風霜に耐えず。帰るを告げて盡くるを待つて、以て原信に副う。是れ天下之正理、亦老僧の本懐を見ん。上旨勸留することを荷蒙す。法を重んじ懷遠の念有り、京に近くて開創すること、敢えて命に違えず、然も一代の開山は千古の盛事、福国利民は聖朝の大典、誠に細事に非らず。恐らくは老て能く任せず、但だ把茅頭を蓋つて鋒を蔵し、拙を養い、或は水辺林下に月を喝し風を捧す。一箇半箇を磕着して、鼻孔の遼天以て洪恩に答へ、従上の砂沙盆托す可くんば、亦老僧が願を足す、抑々見ん。拄杖頭両処に花開き重重して、結果、愈々馨香破芒履、東西に踔跳して、処処に力を得て転干彩、人情仏法両つながら周備し得ば、誰かの功とか云んや云々」とある。

②③右同書、「遊太和田擇地」と題する七言四句があり、隠元も赴いたことが知られる。あと「次遊玉水」の詩があり、南山城の綴喜郡玉水を経て、木津川を下り帰寺したものとみえる。

#### ②④贈龍溪禅徳偈并引

龍溪禅徳、乙未仲秋請余坐方丈、自居小茅舎於西南隅、經閱五春秋如一日、見者以謂不堪、彼以為自得之妙、而屈已従人捨身衛道、既可見矣、況奔走江府、奚啻再四踏破芒履不知幾何、何為法之勞、頗盡其心、是秋諸弟子等抃充教緣、聊伸其足、仍設清供為落成、乃説偈以之云々

とあり、五言古一篇の偈がある。（普門草録・雲濤二集・隠元全集二六六）

②⑤右同書、「応安部摂津守斎」「応曾我又左衛門斎薦乃尊丹波守」「応小浜民部正斎」「示彦坂九兵衛」、次に「全龍溪・虚極賞

菊」が「其四」と題する詩がみられる。

②右同書「冬至後二、承令旨受太和山地基」と題する五言古一篇がある。句中に「誰か知る造化の力、聳を出ず 太和の春。大道は京国に通じ、高峰耀いて、日に新たなり。其中に能く主と作り、四衆自ら來賓す云々」とある。山城宇治郡大和田村と称したところから、太和が日本の古称の大倭に通じるところから用いられたと思われる。新黄檗の進山法語に始まる語録には、「太和集」の名が冠せられている。

②⑦『隠元和尚雲涛二集』巻四に「春仲再遊太和、兼贈近衛基熙大納言」と題する七言八句があり、龍溪も同行したものと思われる。近衛基熙には、寺地がもと近衛家の別業地で、この地を希望するに当り幕府は収公して寄進されたことへの謝意がこめられている。近衛家には摂津伊丹に代替地が与えられた。

なお『木庵禪師年譜』に、「二月同老和尚到太和、看新黄檗地其云々」とあり、共に従ったことが知られる。

②⑧牧野親成の家臣原団之丞正継書留めの日記、藩主家に伝えられ、昭和十五年当主牧野一成子爵が黄檗山訪問後、山田玉田管長に抄録を贈られたものを吉永雪堂が書写し『牧野子爵家所蔵記録』として、文華殿所蔵の「吉永文庫」にある。これにより前久夫「万福寺伽藍に関する覚書」(一)、(『黄檗文華二三号』)に紹介があり、この前論文によった。

なお八月十六日には、老中松平伊豆守信綱が検分に訪れ、牧野親成が同道したことが記されている。

②⑨『普門艸録』に「臘月十六日承 上令旨命京師諸官長交割太和地基并山四至明白述偈識之」と題し、五言八句がある。(隠元全集二七三八頁)

また慧林の『佛日慧林禪師語録』巻五に「至庚子臘月十五日、代師交領太和山地云々」の偈がある。十五日とあるのは前日に赴いたものであろう。なお「原日記」は、注28を参照されたい。

③⑩初めて黄檗に登る

春 太和に入りて、和氣濃かなり

巍然として 宜しく妙高峰に準ずべし

石橋長く架して 驢馬を渡す

大沢 由来 象龍を産し

湘后しやうご 殿前でんぜん 千畝せんせの竹

嶽神がくしん 廟下びやうか 萬年ばんねんの松

天てん 靈地れいぢを留め 幾多いくおほくの世ぞ

恰あたかも 時を待ちて此の宗を立つに似にたりとある。

③①祝允明（一四六一—一五二七）字希哲、号枝山。隱元の遺物を主とする松隱堂の什物目録「黄檗開山塔院什物数」中に、「祝枝山秋興八詠乙軸」がある。この書の品質については問題はあるが、江戸時代の明代文人の書画に対する関心と知識は、黄檗の開立に伴う舶載品が大きく関わっていることが考えられる。

③②原日記に、「寛文元年閏八月九日五箇庄大和田村寺地飯屋出来、富田より隱元禪師去月移住玉ふ」とあるので、ほぼひと月前に現地へ赴いていたものと思われる。飯屋は進山のためのものである。現地は近衛家の別荘で、後水尾法皇の実母中和門院近衛前子の住したところであり居住できる建物はあったものと思われる。なお先発者もいたが、或いは近辺の寺院、やがて領地となる近くの庄屋などが宿舎となり得たとも思われる。

③③『黄檗和尚太和集』巻一に

寛文三年癸卯正月十五日賜紫沙門宗潜奉本朝大將軍令旨請師就本山萬福禪寺為國開堂祝聖師至座前拈請啓云

（中略）

上首白椎云法建龍象衆當觀第一義云々

とある。龍溪を白椎和尚とは記していないが、龍溪宗潜の請によるとしていているところから、上首は龍溪と考えたい。

③④右同書「法語」に、次のように記される。

癸卯五月廿五日

太上皇召龍溪禪徳入内庭賜坐云々

③⑤右同書卷一に、

臘月十一日戒子性派等請上同云々

とある。

③⑥ 『摂陽奇観』 卷十七、寛文十年条に

一、八月廿三日、大風吹西海より逆浪起りて難波の近郷にあぶれ、枚方の辺まで至る。商人船海に沈みて、溺死するもの幾

萬人とも数不知未曾有の事也。

一、同時に衢壇島龍溪禪師遷化（句読点筆者）

とあり、大災害であつたことが知られる。